

優秀賞

父の残してくれたもの

千葉県 柏市立柏中学校 三学年

野口 まえみ

私の父は、一年前に亡くなった。夜中に急に胸が痛いと言い出し、倒れこんでしまい、すぐに病院に運ばれたが、病院に着いた時にはもう心臓は止まっていたらしい。胸部大動脈瘤破裂だった。さよならも言わずに、あつという間に逝ってしまった。

亡くなった後に、何か形見になるようなものを探してみても、父は私達にむやみにものを買ってくれるような人ではなかったので、「お父さんが買ってくれたもの」はほとんどなかった。私はそれを残念に思った。

実は父は九年前に、解離性胸部大動脈瘤という、胸にある大きな動脈の内側がさけてしまう病気になっていた。私は五歳、妹は三歳だった。運が悪ければ、父はこの時に死んでいたかもしれない。もしこの時父が死んでいたら、私達は「お父さん」という記憶をほとんど持てなかったかもしれない。幸いなことに、大きな後遺症もなく、気をつけていれば普通の人と変わりない生活ができるようになり、命を長らえることができた。父はその後、八年間生きた。

病気の後、父はそれまで勤めていた会社を辞めた。収入は不安定だが、家族との時間を優先するために家でする仕事を選んだのだ。学校から帰ってきた時、必ずドアを開けて「おかえり」と言ってくれた。一緒にゲームもした。夕飯は必ず一緒だった。毎週土曜日にはみんなの好きなものを夕飯につくってくれた。旅行もした。父は、私達家族に形として残るものではなく、「お父さんとの思い出」をたくさん残してくれたのだ。

父が残してくれたものは、それだけではなかった。父の死の直後、父名義の銀行口座は凍結され使えず、母は、突然父を亡くした辛さと共に、今後どうやって暮らしていけば良いのだろうと思っていたそうだ。

だが父は、母を受取人とした生命保険を残していた。父はいくつかの保険をかけていた。一つは終身保険という、亡くなった時に保険金が支払われるというものである。もう一つはガンなどに特化したガン保険にも入っていた。この二つの保険が支払われたため、私達家族は当面の間、不安なく生活することができることになった。

さらに、今住んでいる家を建てるために住宅ローンを借りた時に加入していた「団体信用生命保険」（住宅ローンを借りた本人が亡くなってしまったり、

第55回中学生作文コンクール

高度障害状態になった時、ローンの残金分の保険金が金融機関に支払われ、清算できるというもの)によって、今住んでいる家も手放さずにすんだ。

父は結婚当初、病気をする前に保険をしっかりと見直していたそうだ。

「なんでこんなに保険をかけたんだらうね。」

と私が言うと、

「お父さんは心配性だったからね。」

と母が言った。

私は今、父に言いたいことがある。

『天国にいるお父さん。』

あれから一年経ちました。

あんまり話せなかったけど、本当に好きだったよ。

十四年間、育ててくれてありがとう。

私達に思い出を残してくれて、そして家族の未来を残してくれてありがとう。

心配性なお父さん。

これからも、私達のこと、見守っててね。』